



Title	日本スポーツ界における暴力的体質：諸外国の新聞が伝える日本社会の様相
Author(s)	花井, 晶子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2014, 2013, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/72849">https://doi.org/10.18910/72849</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 日本スポーツ界における暴力的体質

## —諸外国の新聞が伝える日本社会の様相—<sup>1</sup>

花井 晶子

### 1 はじめに

2012年12月、大阪市立桜宮高校のバスケットボール部キャプテンが、コーチの体罰が原因で自ら命を絶つた。それ以来、日本のスポーツ界での暴力行為がしばしば新聞紙上をにぎわせた。最も話題となったのは、ロンドンオリンピック代表を含む女子柔道選手15名が監督に虐待を受けたと、日本オリンピック委員会に直訴したことであった。その結果監督はその事実を認め、辞任を余儀なくされた。また時期を同じくして、柔道の元オリンピック金メダリストが女子学生に対する性的暴行罪で有罪判決を受けたことも、日本のスポーツ文化に暴力的体質が内在することを改めて国民に知らしめる契機となった。その後全日本柔道連盟は改革を迫られ、上村春樹会長以下役員全員が入れ替わったが、その中に初めて3名の女性役員を加えるという大きな変革期を迎えた。

日本発のこのようなできごとは、当然のことながら諸外国でも報道された。ここではその中から主に、日本のスポーツ界における暴力・体罰問題の原因について示唆しているものを取り上げる。海外の報道では日本社会の何に着目しているのか、その視点には妥当性があるのかを検証しながら考察する。

### 2 記事の収集方法及び分析の方法論

新聞記事の収集には、LexisNexis Academic<sup>2</sup> というデータベースを利用する。ここから抽出したオーストラリアの *The Daily Telegraph*、イギリスの *The Independent* (オンライン記事)、アメリカの *The New York Times* の記事を扱う。

記事の分析にはN. Fairclough (1993) のCDA (批判的ディスコース分析) 理論を利用する。また一部の記事にはメタファー分析が含まれるが、その方法としてはLakoff and Johnson (2003) の理論を参照する。

### 3 日本スポーツ界の「暴力性」を報じる新聞記事

<sup>1</sup> 本稿は2013年9月21日、大阪府立大学で開催された日本メディア英語学会西日本地区例会にて口頭発表したものに、大幅な修正・追加・変更を施し、書き換えたものである。

<sup>2</sup> 大阪大学図書館のウェブサイトでは、世界各国の新聞・雑誌など5,900以上の情報源を収納しているデータベース、として紹介している。

以下にこの問題を扱っている新聞記事を掲載する。最初に記事のソースとなっている新聞名（その創立時期、販売部数などを註で示す）、次に記事の見出しを太字で示す。三行目に執筆者（背景情報を得られた者についてはそれを註で示す）、記事の掲載日、掲載ページを記し、オンライン記事には掲載時刻も明示する。記事の引用には、記事の最初に書かれているリード部分を挿入する。英文には「」内に日本語訳を付す。記事中、「暴力性」を表わす用語に下線を施す。

### 3-1 *The Daily Telegraph*<sup>3</sup> - State Edition (Australia)

Coaches delivered beatings 「コーチ陣 ビンタを繰り返す」

by Kyoko Hasegawa<sup>4</sup>, Jan. 31, 2013, p. 90

[Lead] JAPAN'S Olympic female judokas were beaten with bamboo swords and slapped by their coaches, officials said yesterday. The admission comes weeks after a schoolboy suicide sparked debate over corporal punishment.

「日本のオリンピック女子柔道選手たちがコーチ陣に竹の刀で殴られたり、平手打ちをされたと、昨日当局者が述べた。この事実が明らかにされたのは、一人の高校生の自殺が体罰をめぐる論議を引き起こしてから何週間もたってからのことである」

The admission comes weeks after ... 「事の次第が明らかになったのは、何週間もたってから」からは、当局の対応の遅さに対する非難の気持ちが認められる。a schoolboy suicide sparked debate 「男子生徒の自殺が論議を引き起こした」のsparkは、「一瞬のうちに火花が飛ぶ」「ぱっと閃光を発する」というイメージを与えるが、それとは正反対に時間がかかるっていることに、「ようやく、今頃になって」という気持ちが感じられる。高校生の自殺をめぐってはすぐにメディアで取り上げられ、あつという間に全国に知れ渡って論議をまきおこしたのに、柔道の場合は本人たちが訴えてもなかなかその声が届かなかった。この対応の違いに着目すると、女性たちが訴えた相手は日本スポーツ界の巨大な組織であり、そこにはさまざまな思惑があったのであろうということが示唆される。

Under a 1947 law, teachers are not permitted to physically discipline their charges, and many react with horror to the idea.

「1947年の法律の下では、教師は生徒を身体的に罰することは許されないが、この理念に対しては多くの教師が強い反感を示した」

教師の体罰禁止は、実は1879年（明治12年）に始まっていた<sup>5</sup>。つまり、最初の法律から135年、戦後の新しい法律ができてからもすでに67年がたっている。それでも今でも体罰問題がなくならないのは、おそらく

<sup>3</sup> シドニーで発行されている日刊紙で、創立は1879年。ウェブサイト Ryerson Index の“Sydney Daily Telegraph”より。2011/11/11(12:00AM)付 Daily Telegraph 紙 “It's official · The Daily Telegraph is simply the best”という記事によれば、同紙の発行部数は34万8千部となっている。

<sup>4</sup> 日本人名と思われるが、オーストラリア紙の記者であるので、ここでは海外発の日本記事の一つとして、他紙と同様に扱う。

<sup>5</sup> 日本では1879年（明治12年）には学校体罰が法禁されていた。世界的にはかなり早く、これ以前にヨーロッパで学校体罰を法禁していた国は6カ国のみであった。寺崎（2001）p. 225。

教師の側には、実際の学校現場での体罰は当たり前という認識があるのだろうと考えられる。そのことが、many react with horror to the idea 「多くの教師がこの理念に反感を示した」という部分に示されている。体罰を法律で禁止されたら、どうやって生徒を指導すればよいのかという教師側の反発や戸惑いが、ここから推察される。

Japan's education system retains many of the quasi-militaristic attitudes that were common when public schooling became widespread in the first half of the 20th century.

「日本の教育制度は、20世紀前半に公教育が広まった時には普通に見られた半軍国主義的傾向のある多くのものを、いまだに保持している」

retainsからは「まだ持っている」「持ち続けている」、that were commonからは「(当時は)当たり前だった」という意識が伝えられる。そこには、今は状況が違っているのに、日本の教育がいつまでも the quasi-militaristic attitudes 「軍国調の性向」を捨てずにいるとは、あまりにも時代遅れだという批判的視点が強調されている。この軍国主義の影響については、朝日新聞紙上で政治学者片山杜秀氏が、日露戦争後の大正末期から学校体育に軍事教練が課されたことにルーツがある、と述べている<sup>6</sup>。「持たざる国」の敵国は体格もよく、装備もすぐれていた。それに対抗するためには精神力の強化が必要であり、やる気のないものには「体罰」が課された。戦後日本から軍隊はなくなったが、「暴力的指導の伝統」は残った。それが今日のスポーツ界にも受け継がれないと解説する。つまり、今日のスポーツ界に蔓延する「しごき」や「体罰」は、100年以上前の軍隊の伝統の残滓であり、その暴力的な指導を受けた選手が指導者となって、次世代にまた「体罰」を引き継いでいく。それが日本スポーツ界の構図であると考えることは、現実を反映していると思われる。

### 3-2 *The Independent*<sup>7</sup> (on-line) (UK)

Judo: Slapped, kicked and beaten with bamboo – the training horrors that Japan's women underwent in the run-up to London 2012; As Europe's leading judo players gather in Budapest for the European Championships, the full story is emerging of what Japan's women suffered ahead of last year's Olympics 「柔道：手で叩かれ、足で蹴られ、竹で殴られた—ロンドン2012年大会への準備段階で日本の女子選手たちが体験したさまざまなトレーニングの恐怖；ヨーロッパの主要な柔道選手が欧洲選手権のためにブダペストに集合するにつれて、昨年のオリンピックに先立って日本の女子選手たちが被ったことの一部始終が明らかになろうとしている」

by David McNeill<sup>8</sup>, Apr. 28, 2013, 12:00 AM GMT, Section: Sport

<sup>6</sup> 片山杜秀「体罰、近代日本の遺物」朝日新聞 2013/2/19 (p. 16)。

<sup>7</sup> イギリスの日刊全国紙。創刊は1986年10月と新しいが、*The Guardian*、*The Times*と並ぶクオリティペーパーの一つ。どの政党からも独立していることを旨とする。クロージャー (1991) p. 72。創刊年の発行部数は42万部であるが(p. 216)、2013年8月のイギリスのABC (Audit Bureau of Circulation) の統計では、6万9千部に減っている。ウェブサイト Media News " National Newspaper Circulation Figures Decline" より。

<sup>8</sup> Japan Times のライター紹介によれば、記者はアイルランド出身で、現在は東京在住。上智大学で教鞭をとるかたわら、複数の国際的な報道機関に記事を提供している。ウェブサイト " The Japan Times Writer" より。

[Lead] In the afterglow of the London Olympics, Ryuji Sonoda enjoyed the sort of gold-plated reputation enjoyed only by a small group of elite athletes in Japan. A former junior judo star, the 39-year-old was known for his fierce dedication to the traditional martial art and its sweat-drenched ethic of discipline and courage. As head coach to Japan's female Olympic squad he was revered, watching over the women last summer like a bear over his cubs .... Unknown to all but the women, however, Sonoda practised a particularly painful brand of tough love.

「ロンドンオリンピックの余韻が残る中、日本のエリートスポーツ選手の小集団だけに享受される金ピカの名声ともいえるものを、園田龍二は楽しんだ。かつてジュニア柔道の花形選手であった39歳の園田は、この伝統武芸への、そしてその規律と勇気とを求道するスポーツ倫理への、熱狂的な献身で知られていた。日本女子オリンピック選手団付きの監督として崇拜され、昨年の夏、熊が小熊を見守るように、女子選手たちの面倒を見た。しかし園田は、女子選手以外の誰にも知られていないのだが、愛の鞭のとりわけ痛ましい焼印を励行したのであった」

女子柔道監督園田龍二を皮肉たっぷりに描写している。園田は a former junior judo star 「ジュニア柔道の元花形選手」であったと、昔の華々しい栄光を紹介した後に、39歳になった彼の現在の活躍が語られる。柔道への dedication 「献身」、he was revered 「尊敬を受けていた」、watching over the women 「女子選手たちの世話をした」など、一見肯定的に見える言葉が並ぶ。しかし最後の文では、unknown to all but 「～しか知らないことだが」と、however 「でも実は」という言い回しによって、一気にその裏の面を暴露する。驚くことに、園田は tough love 「愛の鞭」を振っていたというのである。

一行目の gold-plated reputation 「金ピカの名声」に始まり、肯定的な名詞に否定的な形容詞が修飾されている事例が目につく。ここに記事の隠れた意図が見え隠れする。gold-plated はおそらくオリンピックの金メダルを意識した言葉と思えるが、「金メッキされた評判、ただ金ピカのように見えているだけの見せかけの名声」であろう。三行目の his fierce dedication 「彼のすさまじいまでの献身」からも、別の意味が浮かび上がつて来る。fierce の本来的な意味「獰猛な、残忍な、攻撃的な」を考えると、dedication のもう一つの意味「専念、専心」<sup>9</sup>が生きて来る。するとここには、「彼の攻撃的な専念」、つまり「ひたすら暴力的行為に打ち込んでいた」という、新たな意味が読み取れる。

また、its sweat-drenched ethic of discipline and courage は、sweat-drenched 「汗にまみれた」と ethic 「倫理観、価値体系」という異色の組み合わせから、柔道というスポーツを通じて「汗まみれになりながら求める、規律と勇気の倫理観」、あるいは、根性論のことと推察される。日本では肯定的な価値観とされるそのスポーツ倫理だが、ここでは否定的な意味合いを持たせていることが感じられる。sweat には俗語で「拷問」という意味があることに着目すると<sup>10</sup>、次の discipline の「懲戒、折檻」というニュアンスと結び付く。さらに OED

<sup>9</sup> OED (Simpson and Weiner, 1989) の dedication の項に、[fig. The giving up or devoting (of oneself, one's time, labour, etc.) to the service of a person or to the pursuit of a purpose] 「比喩：(自分自身、自分の時間、労力などを) ある人の奉仕へと、あるいはある目的の追求へと専念すること、没頭すること」とある (Vol. IV, p. 356)。OED についてはこれ以降も、Supplement 以外は 1989 年版であり、その日本語訳はいずれも拙訳である。

<sup>10</sup> OED Supplement (Burchfield, 1986) では、動詞 sweat の項に、[slang. To subject (a prisoner, etc.) to close interrogation or torture; to give the 'third degree' to (someone)] 「俗語：(囚人などを) 厳重な取り調べや拷問にかける、(誰か)に拷問を与える」という記載があり、sweat-box [a room in which a prisoner undergoes intensive questioning] 「囚人が集中的尋問を受ける部屋」が名詞の例として挙げられている (Vol. IV, p. 665)。

の courage には ‘wrath’ という意味が挙げられているが<sup>11</sup>、wrath には「懲罰、天罰」<sup>12</sup>という意味があることから、sweat-drenched ethic of discipline and courage には、「拷問だらけの、折檻と懲罰をよしとする価値観」という意味が隠されていると考えることができる。

さらに、園田は watching over the women 「女性たちの世話をした」が、その様子は、like a bear over his cubs 「熊が自分の小熊を見守るよう」だったという。この部分は、前半の he was revered 「彼は尊敬された」と呼応する。しかし、ここで bear が出てくることにより、この監督が別の顔を持っていることが暗示される。bear が人を象徴する時の意味「乱暴者、がさつ者」<sup>13</sup>と、cub の象徴としての意味「不作法な若者、若造」<sup>14</sup>から、like a bear over his cubs は「あたかも一人の乱暴者が娘の悪い若者たちを見張るよう」だったという、別の解釈が成立する。この時 watching over the women も、he was revered と逆説的に繋がり、「女性たちを監視した」と読み換えることができる。するとここでも、暴力が当たり前のように振る舞われたであろうことが想像される。

つまり、このリードの部分には、随所に「暴力」をキーワードとするメタファーが巧妙に織り込まれ、意味の二重構造が図られていると考えられる。ここには VIOLENT HUMAN BEHAVIOR IS ANIMAL BEHAVIOR<暴力的な人間行為は動物の行為である>という概念メタファーが認められる (Kövecses, 2002)<sup>15</sup>。メタファーを解き明かすことによって、一見肯定的な表現の裏に隠されている否定的な意味合いが、強烈なアイロニーとなって浮かび上がって来る。このようにして、園田がいかに暴力的で動物的な人間であったかを読み手に連想させる効果は大であろう。さらに、「元ジュニア柔道のスター選手」という輝かしい過去を持ち出すことによって、暴力的指導者へと変身した現在の園田とのギャップが印象づけられている。

ここでは監督個人の人間性を問題にしているが、以下には柔道連盟の組織そのものへの言及がある。

To [former Olympian Kaori] Yamaguchi's amazement, the all-male federation ignored the women and sent Sonoda back to work as national coach after a verbal warning. A month later, he was still boasting that his "strict" training methods paid off in London.

「(元オリンピック選手の) 山口 (香) が驚いたことには、男性ばかりの日本柔道連盟は女子選手たちを無視し、口頭注意だけで園田を全日本監督としての任務に戻した。一か月後、園田はまだ自分の『厳格な』トレーニング方式がロンドンで成果をあげたと豪語していた」

the all-male federation ignored the women 「男性ばかりのこの連盟は女性たち (の訴え) を無視した」の all-male により、今日の日本柔道界に君臨するトップの組織が男性支配社会であり、女性幹部を輩出していないことが明らかにされる。確かに、日本のスポーツ組織における女性役員の比率は、あまりにも低いのが現状

<sup>11</sup> OED の courage の項に [Anger, wrath] という記載がある (Vol. III, p. 1051)。

<sup>12</sup> 竹林 (2002、電子版)。OED の wrath の項には [Anger displayed in action: the manifestation of anger or fury, esp. by way of retributory punishment, vengeance:] 「行動に表わされた怒り。特に報いとしての罰・復讐のための、怒りまたは激怒の現れ」とある (Vol. XX, p. 607)。

<sup>13</sup> OED の bear の項に、 [fig. A rough, unmannerly, or uncouth person.] 「比喩: 乱暴な、無作法な、あるいは粗野な人」となっている (Vol. II, p. 19)。

<sup>14</sup> OED の cub の項に、 [fig. An undeveloped, uncouth, unpolished youth.] 「比喩: 未成熟で、不作法で、洗練されていない若者」とある (Vol. IV, p. 101)。

<sup>15</sup> Kövecses (2002), p. 124.

である。世界では女性の登用率を20%に上げようという取り組みがある中、日本におけるその比率は、最新の数字でも4.2%しかない<sup>16</sup>。この数字から、それはスポーツに限らないことが推定される。実際ビジネスの世界においても、女性役員・取締役比率の国際比較（2013年）で、日本は45カ国中44位（1.1%）という低さであったことは注目に値する<sup>17</sup>。また最新の「世界男女格差報告」<sup>18</sup>から、政治の世界でも日本女性は重用されていないことが示される。例えば女性衆議院議員の割合はわずか8%と低く、この分野での世界順位は118位であった。これらの数字からも、この国が多様性を認めない、硬直した男性優位社会であるという印象を与えていることは否めない。

さらに、日本社会の縦構造のあり方がもたらす弊害についても追及する。

Japan is not the only country struggling with violence and hazing in sport. ...But observers say Japan's problem is complicated by the deep cultural reverence for the sensei, or teacher.

「スポーツにおける暴力やしごきと格闘しているのは、日本だけではない。... だが日本の問題は、教師を意味するセンセイというものに対する、文化的な深い敬意があるために、面倒なのだと識者は見ている」

坂上（2013）によれば、海外でもスポーツにおける暴力は存在するが、日本の運動部では「1年奴隸、2年平民、3年天皇、4年神様」という序列が未だになくならず、中学校の部活でもこれほど「軍隊的色彩が強い国」は、他にはないのではないか、そのような上下関係は、海外からの帰国生が日本の部活で最も嫌がることであるが、それが「体罰」や「しごき」を生み、受け入れる土壌となっているのだという<sup>19</sup>。元サッカー日本代表監督であったオシム（2007）も、選手が「監督へ意見する」経験を持たずに育ったことを疑問視する<sup>20</sup>。

この記事ではその背景として、日本人には the deep cultural reverence for the sensei 「センセイに対する文化的な深い敬意」があり、そのために Japan's problem is complicated 「日本の問題は厄介なのだ」と指摘する。そして敬意を与えられた側は、時にそれを権威として利用するのを躊躇わない。日本のスポーツ界では、上位にある者が絶対的な権威をもって下位の者に服従を強いる風習が今も続いている。そこでは自由にものが言えない環境であることから、暴力が蔓延りやすい土壌となっているのが実情であろう。

### 3-3 *The New York Times*<sup>21</sup> (USA)

Japan Confronts Hazards of Judo 「日本 柔道事故に立ち向かう」

by Daniel Krieger & Noriko Norica-Panayota Kitano<sup>22</sup>, Apr. 18, 2013, Section; Column 0

<sup>16</sup> 平成 23 年度に順天堂大学が、JOC 女性スポーツ専門部会の協力のもと実施した「スポーツ組織に関する調査」の結果より。ウェブサイト「順天堂大学女性スポーツ研究」。

<sup>17</sup> 日本の 1.1% は、先進国の平均 11.8%、新興国の平均 7.4% を大きく下回る。45 位 (0.0%) のモロッコは調査対象企業がわずか 2 社だったのに対して、日本企業は 447 社が参加した上での数字なので、実質的には日本が最下位と言えるだろう。ウェブサイト「世界ランキング統計局」の[各国の女性役員比率ランキングと推移 (2013 年)]。

<sup>18</sup> スイスにある国際団体「世界経済フォーラム」が 136 カ国を比較している。朝日新聞 2013/12/7 夕刊 3 版 (p. 2)。

<sup>19</sup> 坂上 (2013) pp. 44- 47。

<sup>20</sup> オシム (2007) p. 48。

<sup>21</sup> アメリカを代表する日刊紙で、創立は 1851 年。特に国際情勢の報道にすぐれている。日本貿易振興会 (1982) p. 153。2009 年の発行部数は 92 万 8 千部。矢野恒太記念会編 (2012) p. 428。

<sup>22</sup> フリージャーナリスト・翻訳家。AP 通信や *The Times* に記事を提供している。LinkedIn “Noriko Kitano”による。ここに、Noriko Norica-Panayota Kitano の書いたこの柔道記事のウェブサイト

[Lead] Daisuke Kitagawa turned 20 last month, but he does not know that. He has been in a coma since 2008, after a bad fall at a school judo competition, and his chance of waking up is extremely slim. He dreamed of becoming a police officer, but he never made it past the first month of high school.

「北川大輔は先月二十歳を迎えたが、本人はそのことを知らない。2008年学校の柔道大会で激しく投げられてからずっと昏睡状態にあり、意識が戻る可能性は極めてわずかである。大輔は警察官になることを夢みていたが、高校入学後一ヶ月で夢は断たれたのだ」

2008年5月に横浜で実際に起こった柔道事故から記事が始まる。この事故は、一ヶ月前に柔道を始めたばかりの高校一年生北川大輔が、体重が二倍もある経験者の試合前練習で投げられて急性硬膜下血腫を起こし、意識不明の状態に陥ったというものである<sup>23</sup>。昏睡状態から目覚める可能性が extremely slim 「極めてわずかしかない」からは、生きている限り意識不明の状態が続くのかもしれないという不安を駆り立てる。He dreamed 「彼は夢見た」と、北川少年の夢が語られる。かつては明るい未来が広がっていたのに、現実には he never made it 「夢は二度と届かなかった」のであった。

このように、最初に柔道のもたらす衝撃的な障害の例を読者に提示し、その危険性を警告する。

Dr. Robert Nishime, chairman of sports medicine for USA Judo, the sport's federation, is a Japanese-American who has spoken to victims' families. He said that the Japanese cultural trait of not giving up, called *gaman*, might explain why a concussion, which can be subtle, could be played down by the instructor or the child. The danger is that another head trauma soon after the initial injury can cause "second impact syndrome", which can be devastating.

「ロバート・ニシメ医師は、USA 柔道というスポーツ連盟のスポーツ医学委員長であり、犠牲者の家族に助言を与えてきた日系アメリカ人である。ニシメ医師は次のように述べた。我慢と呼ばれる、諦めないという日本文化の特性から、なぜ脳震盪が、潜行性である場合もあるが、指導者や子供本人によって軽く扱われることがあるのかを説明できるかもしれない。危険なことには、最初の障害から時間をおかず再び頭部に外傷を受けると、『セカンド・インパクト・シンドローム』を引き起こすことがあり、これはひどい損傷をもたらす可能性がある」

日本では、a concussion could be played down by the instructor or the child. 「脳震盪が起こったとしても、指導者も子供本人も大したことではないと思ってしまうことがある」が、それは、the Japanese cultural trait of not giving up, called *gaman* 「我慢と呼ばれる、諦めないという日本文化の特質」のせいではないかと、「我慢」を否定的に見ていることが遠まわしに語られる。そこには、日本人は「我慢」をしなければならないと教えられているために、重大な障害に繋がる前兆を見過ごしてしまうのではないか、「我慢」せずにもっと早く適切な処置を施していたら、大きな事故を防げたかもしれないのに、という批判的な思いが込められている。しかしその対象は、柔道を教える現場の指導者に対してというよりも、日本文化という、日本社会の体質その

([http://www.nytimes.com/2013/04/18/sports/japan-confronts-hazards-of-judo.html?ref=global&\\_r=1&](http://www.nytimes.com/2013/04/18/sports/japan-confronts-hazards-of-judo.html?ref=global&_r=1&)) が載っているので、Noriko Kitano と Noriko Norica-Panayota Kitano は同一人物であると考えられる。日本出身者である可能性もあるが、註 4 と同様に扱う。

<sup>23</sup> 「柔道練習で障害 高校に賠償命令、東京地裁、逆転判決」朝日新聞 2013/7/4 (p. 38)

ものに向けられているために、自らも日系アメリカ人であるニシメ医師の言がひどく抑制された形になっていると考えられる。

確かに日本人は「我慢」を美德と教えられる。特にスポーツにおいては必要な要素であろう。しかしながら、命の危険を冒してまで強要すべきではないという認識が、スポーツの現場で不足しているとしたら、大きな問題であると言わざるを得ない。

Physically disciplining children is still widely accepted in Japan, especially by coaches and parents, who see it as a legitimate educational tool. Uchida [Ryo Uchida, an assistant professor at Nagoya University], the school safety researcher, strongly objects to the practice. “They call it corporal punishment,” he said, “but more precisely, it’s violence and abuse.”

「子供たちを身体的に罰することは、今でも、特に指導者や子供の両親によって、日本では広く受け入れられている。指導者も親もそれを正当な教育の手段と見ているのだ。学校安全の研究者であるウチダ（ウチダリョウ名古屋大学准教授）は、このような慣例に強く反発する。…『あの人達はこれを体罰と呼びます』とウチダは言った。『でももっと正確に言えば、暴力ですし、虐待ですよ』

still widely accepted 「まだ広く受け入れられている」の still 「今でもなお」によって、physically disciplining children 「子供たちを身体的に罰すること」は、実はずっと以前から違法であった行為であり、いけないことなのに、という前提が含意されている。そういう違法行為が今も続いているのは、それを支持する人たち coaches and parents 「コーチと親」がいるからであり、その理由は、who see it as a legitimate educational tool 「両者は体罰を教育の合法的な手段と見ている」からだというのである。ここに、いくら法律で体罰を禁止しても、子供を取り巻く大人が体罰を必要だとみなし、指導者による体罰を保護者が容認するという現状がある限り、体罰はなくなるのではないかという非難の論議が感じられる。ウチダ准教授の、それは“corporal punishment”『体罰』ではなく、“violence and abuse”『暴力であり、虐待だ』という発言は、その気持ちを代弁するものとなっている。

#### 4 まとめ

多くの国民にとってスポーツは人生の楽しみの一つであり、時には生きるための支えともなるものであろう。しかしながら、2012年12月に大阪の高校生がクラブのコーチの体罰に苦しんで自殺をした事件を発端に、日本スポーツ界の暴力的体質が人々の注目を浴びることになった。海外の新聞もこの件を取り上げ、考えられる原因を提示している。それははからずも、日本社会が持つ古い体質を露呈するものであった。

オーストラリアの『デイリー・テレグラフ』紙は、日本の教育には軍国主義の名残りがあるという。多くの体育大学出身の体育教師が、自らも「暴力的指導」を受けて育成されてきたことを考えると、学校のクラブ活動で今でも「体罰」がなくなるのではないかとの「暴力的指導」の連鎖という一つの問題に突き当たる。スポーツの場に「暴力的指導の伝統」が残っていると考えることは、現実的な見方として受け止められるであろう。

イギリスの『インディペンデント』紙は複数の要因を提示する。まず、指導者本人の人間としての資質が問題となった。次に、全日本柔道連盟の組織自体が男性支配の様相を帯びていることから、日本社会は女性の声

を無視する、男性優位社会であることが示唆された。さらに、日本のスポーツ界には明確な上下関係があることが、暴力と関係しているのではないかと着目されたが、日本では指導者は尊敬を受ける存在であるという文化的な背景を考えると、これは厄介な問題だという指摘がなされた。ともに目新しい発見ではないが、日本スポーツ界が長く抱える課題となるだろう。

アメリカの『ニューヨータイムズ』紙からは、日本ではスポーツの指導者も保護者も、子供に対する体罰を教育の手段として容認する傾向があり、そのような意識が暴力を存続させている原因となっているのではないかと非難する姿勢が窺われた。さらに、日本人の美德とされる「我慢」という特性が、スポーツ事故を見逃がすことに手を貸しているのではないかという危惧が示された。この指摘を軽視せず、スポーツにおける過度の我慢は命を危険にさらす可能性があることを改めて認識し、警告する必要がある。

今回はスキャンダルに近い出来事を調査対象としたため、海外の新聞が批判的な見方を展開しているのは予想通りであった。それでも日本の負の面をいたずらに扇り立てることはなく、日本社会を冷静に等身大に捉えようとしている姿勢も窺われた。ここで示されたそれぞれの要因は必ずしも日本に特異なものであるとは思われないが、少なくとも確実に日本社会的一面を表わすものであり、海外から見た一つの日本像であると言えるであろう。

#### 参考文献

- 朝日新聞 2013/7/4 「柔道練習で障害 高校に賠償命令、東京地裁、逆転判決」
- 朝日新聞 2013/12/7夕刊 「日本、男女平等ランク世界105位」
- オシム、イビチャ (2007) 『日本人よ!』 新潮社：東京
- 片山杜秀「体罰、近代日本の遺物」朝日新聞 2013/2/19
- クロージャー、マイケル (1991) 川上宏、岩崎知恵子訳『偽刑：インディペンデント紙の挑戦』サイマル出版会：東京
- 坂上康博 (2013) 「部活での暴力はいつから始まったか」 三輪定宣・川口智久編『先生、殴らないで!』 かもがわ出版：京都
- 竹林滋 (編) (2002) 『新英和大辞典第六版』 研究社：東京
- 寺崎弘昭 (2001) 『イギリス学校体罰史』 東京大学出版会：東京
- 日本貿易振興会編 (1982) 『世界の新聞・雑誌ガイド』 日本貿易振興会：東京
- 矢野恒太記念会編 (2012) 『世界国勢図会2012/2013』 矢野恒太記念会：東京
- Burchfield, R. W. (Ed.) (1986) *A Supplement to the Oxford English Dictionary* Vol. IV, Oxford University Press: Oxford
- Fairclough, N. (1993) *Discourse and Social Change*, Polity Press: Cambridge.
- Kövecses, Z. (2002) *Metaphor: a practical introduction* Oxford University Press: Oxford and New York.
- Lakoff, G. and Johnson, M. (2003) *Metaphors We Live By* The University of Chicago Press: Chicago and London.
- Simpson, J. and Weiner, E. (Eds.) (1989) *Oxford English Dictionary* Second Edition. Vols. II, III, IV, XX, Clarendon Press: Oxford

## 参照ウェブサイト

大阪大学図書館データベース一覧

<http://www.library.osaka-u.ac.jp/dblist.php> (最終参照日 2014/3/20)

順天堂大学女性スポーツ研究（「女性スポーツリーダーシップカンファレンス2012」開催報告）

<http://www.juntendo.ac.jp/athletes/news/20121129.html> (2014/3/20)

世界ランクイング統計局（「各国の女性役員比率ランクイングと推移」2013年）

<http://10rank.blog.fc2.com/blog-entry-252.html> (2014/3/20)

LinkedIn "Noriko Kitano"

<http://jp.linkedin.com/pub/noriko-kitano/1/911/895> (2014/3/20)

Media News " National Newspaper Circulation Figures Decline"

<http://media-news.fournewsletter.com/media-industry-update/national-newspaper-circulation-figures-decline/> (2014/3/20)

"Ryerson Index Inc"

<http://www.ryersonindex.org/dtdths1.htm> (2014/3/22)

The Daily Telegraph 2011/11/11 "It's official - The Daily Telegraph is simply the best"

<http://www.dailyleague.com.au/its-official-the-daily-telegraph-is-simply-the-best/story-e6freuy9-1226191942494> (2014/3/20)

The Japan Times Writer

[http://www.japantimes.co.jp/author/int-david\\_mcneill/](http://www.japantimes.co.jp/author/int-david_mcneill/) (2014/3/20)